りんご飴

深本　弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
りんご飴

【Ｎコード】
Ｎ９３５１Ｖ

【作者名】
深本　弥生

【あらすじ】
夏だけ帰ってくる君と行く、最後かもしれないお祭り。
君はいつも私を置いて先に歩いて行ってしまう。
私を置いて、これ以上遠くに行かないでほしい。
夢に向かって真っすぐ進んでいく幼なじみに恋する女の子のお話。

※本作品は、以前「金魚掬い」という題名で公開していたものを書き直したものです。

1．嬉しくて、寂しい

ジリジリと太陽が甲子園球場を照りつける。
たくさんの観客の応援の声と吹奏楽部の演奏をＢＧＭに彼は下を向いて大きく息を吐いた。顔を上げた彼は口元を少しだけ歪めていた。
九回裏、同点。ツーアウト満塁のフルカウント。
彼にとっては絶望的な状況なのに、彼は笑っていた。
私以外は彼が笑ったことには気がついていないだろう。だから私だって、祈るんじゃなくて応援するんじゃなくて、笑ってやる。
「ばーか」
私が呟いたと同時に彼は球を投げた。

「ただいま、千秋」
「おかえり、渉」
控えめなノックに答えると、真っ黒に日焼けして、坊主頭で、身長だけはやたらでかくて、ちょっとばかし涼しげな顔の渉がのっそりと部屋に入ってきた。
部屋に飾ってある風鈴が風を受けてちりりんと鳴る。それにかぶさるように蝉が鳴く。
渉を一瞥してからクッションを抱いてごろごろとベッドに転がる。ドサッと鞄を置いて、本棚の前に渉が座った。
私は、夏が大嫌い。だけどあなたが帰ってくる、八月最後の二週間が私の一番の楽しみなの。
年々高まる気持ちに比例するように、年々かっこよくなっていく渉を見るといつも少しだけ寂しくなる。
「……残念だったね、試合」
クッションを抱きしめるふりをして、出来るだけ普通を装って、

渉と目線を会わせないで呟いた。
「あぁ、観てた？」
「観てたよ！　当たり前でしょ！」
起き上がって、クッションを渉に投げ飛ばすと彼は片手でそれを簡単にキャッチする。
「うん」
私の顔を見て微笑んでから、渉は本棚から漫画を抜き取ってパラパラと読み始めた。
「テレビで言ってたけどさ、プロも大注目なんだってね、渉」
「あー……そうなの？」
ごまかしたって、わかるのよ？
嬉しいときすぐ顔に出るんだから。ほら、口元がゆがんでる。私だけがわかる君が隠したいときの笑い方。
「今年もお祭りまではいる？　一緒に、行ける？」
「当たり前じゃん。そのためにこっちに帰ってきてるようなもんなんだから」
「そっか」
三年前まではこんなこと聞かなくても、いつでも渉は手の届くところにいて傍にいるのが当たり前だった。
無口で無愛想で負けず嫌いの渉は小さいときからずっと野球を頑張っていた。中学に入ってからは地元でも評判の投手に成長した。
高校は、甲子園常連の名門のチームに誘われて私の手の届かない遠くに行ってしまった。
それから気がついた、渉への想い。
一年のうち、会えるのは夏が終わりかける二週間ほど。地元で行われるお祭りが終わってからすぐに帰ってしまう。
「ここの祭に千秋と行かないと、なんか夏が終わったーって感じがしないんだよな」
こうやって、渉はいつもいつも私を期待させる。私のために帰ってきてくれてるのかなって勘違いしちゃうよ？　好きだよって、ず

っとここにいてほしいって言ってしまいたくなる。
だけど、そんなこと簡単に言えない。
渉は卒業後プロに進んでもやっていける実力があるとテレビも新聞も言っていた。ベスト４で渉の学校が消えてしまったことを実況の人も解説の人も嘆いていた。
渉は、どこまでいってしまうんだろう。
渉の小さいときからの夢であるプロ野球選手になることは私だって嬉しい。だけど、渉が私の手の届かないところに行ってしまうのはすごく寂しくて、怖い。
もう会えなくなる？　今年が最後なの？
「千秋？」
「え？」
「大丈夫か？」
渉は読んでいた漫画を床に伏せて、私の顔を覗き込んだ。急に近づいてきた渉にびっくりして手と足をバタバタさせながら後ずさって渉と距離を取った。
「……なに、その奇妙な動き」
「や、あの、な、なんでもない！」
ぎゅっと拳を握って俯いていると、ふわりと渉の大きなてが頭を包んだ。
「渉……？　ぎゃあ！」
私の髪の毛をぐしゃぐしゃっとしてから、渉は何事もなかったようにまた漫画を読み始めた。

2．履きなれない下駄

「……」
「へ、変？」
家の門の外で私を待っていた渉は、私を見て一瞬表情を止めた。
今回は、いつもなんだか気恥ずかしくて着ていなかった浴衣を着て私が玄関に現れたからである。髪の毛だって浴衣に合うように少し上にあげてセットした。
「な、なんとか言ってよ……っ」
無反応な渉にびくびくしながら反応を促すと渉はふいっと顔をそむけた。
「……いいんじゃない？」
「え」
「馬子にも衣装って感じで」
そう言うと渉はすたすたと私を置いて歩き出した。
「ちょ！　待ってよ！　馬子にも衣装ってなに！」
「そのまんまの意味」
追いついた私の顔を見てにやっと意地悪く笑う渉にドキッとしてしまう。
「ばか。渉のばか」
カラン、カラン。
履き慣れない下駄の音が響く。ポケットに手を突っ込んでゆっくりと歩いてくれる渉の隣は、幼なじみの特権。

「相変わらず人多いなー」
「この辺、お祭りってこれくらいだもん。あ、渉！　たこ焼き食べよう！」
渉の腕を引っ張って人ごみをかき分ける。

「あ、でもりんご飴もいいなー」
「そんなにあわてなくてもいいだろ」
「早く食べたいのっ！」
今日が最後かもしれない。
そう思うと落ち着かなくていてもたってもいられなくなる。
腕を掴んでいる手にギュッと力をこめて渉が近くにいることを確認して安心する。
大丈夫。今日は、渉はちゃんと私の傍にいてくれる。
「で、これどーすんだよ」
渉の左手にはタコ焼き。右手には二本のりんご飴。私の両手は焼きそばで塞がっている。
「と、とりあえず、座って食べよう！」
人ごみから抜け出して神社の裏手に回り、空いているベンチに腰かけた。
「こんなに買って、食べれんのか？」
「食べるよ！」
たこ焼きを食べ終えると、渉は喉が渇いたと言って私と荷物を置いてまた人ごみに戻っていった。手持ち無沙汰な私はりんご飴の包みを開いて一口なめた。
「あま……っ」
甘い飴の先にあるりんごは、酸っぱいのだろう。
だからゆっくりと飴をなめる。出来るだけ長く、この甘さを感じていたいから。
「遅いな……」
待っているだけじゃ、傍にいてほしいと願うだけじゃ。
「っ……甘、い」
どんどん遠くなるばかり。
「渉……っ」
行かないで、私を置いて遠くに行かないで。
「あれ、佐藤さん？」

顔を上げるとクラスメイトのが私を見下ろしていた。
「岡。彼女と？」
「うーん、幼なじみと。今トイレ待ちしてんの」
「あー、混むもんね」
「佐藤さんは？　一人じゃないよな」
「うん、私も幼なじみと来てるんだ」
「あー……ケンカでもした？」
「してないよ。なんで？」
「泣きそうな顔してる」
そう言うと岡は困ったように笑って、よっこいしょと私の前にしゃがんだ。
「はい、目開けたまま上向いてー。何か楽しいこと考えて。泣いたらせっかくの化粧がとれるぞ」
それだけ言って岡は祭に戻っていった。
「あ……」
岡に言われたとおりに上を向く途中で、視界の端に渉の姿を捉えた。
「渉！」
頭を元に戻して立ち上がり、渉に駆け寄った。
「……俺、邪魔そうだし帰るわ」
「え……？」
持っていたジュースの片方を私に押し付けて渉はすたすたと人ごみに紛れてしまった。
「な、で……」
なんで、急に帰っちゃうの？
まだ花火始まってもいないし、焼きそばだって、りんご飴だって残ってるよ？
「渉っ……った！」
カランと音を立てて履きなれない下駄が私の歩みを止めた。
「いたい……渉……！」

下駄の鼻緒で擦ってしまった親指と人差し指の間がじんじんと痛い。

立ち上がり、顔を上げたときには渉の姿はもう見えなくなっていた。

3．甘い飴のその奥

「おばさん、渉は……？」
「寮に入ることになったのよ、高校から……渉に、何も聞いてない？」
私は、何も知らなかった。
中学を卒業してからは家を出て、遠くの高校に行ってしまうこと。
知らなかったのは私だけ。
私には言わなくていいって、渉は思ったのかな。だって私はただの幼なじみだから。
渉はいつも私に何も言わないで、私の手の届かないところに行ってしまう。

――ねぇ、私を置いて行かないで……っ

「いった……」
歩くたびに下駄の鼻緒が擦れて痛い。人にぶつかりながら渉の姿を探すがちっとも見当たらないし、なんど携帯電話を鳴らしても呼び出し音が鳴り続けるだけ。
「帰っちゃったのかな……ほんとに……」
足の痛みはひどくなる一方で歩くことに限界を感じた私は、お祭りが行われている神社の中心から少し歩いたところにある小さな祠の横の大きな石に座った。
「わー……血が出てる……」
とりあえず下駄を脱ぎ、足を下駄の上にのせて休憩させる。
「……っ、」
痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。
渉はいつだって私の先を行ってしまう。みんなに気がつかれない

あの笑みを浮かべて、真っすぐに歩いて行く。渉が進んでいく方向は眩しくて、私には到底たどり着くことが出来ない場所。
それでも私は向日葵のように太陽に向かう君を眩しいと文句を言いながらも見つめ続け、追いかけ続けるのだ。
「待って」と自分のペースを押しつける理由も、「行かないで」と引きとめるための理由も、ただ咲いているだけの向日葵の私にはない。
「っ、渉……っ……！」
「なに」
ぶっきらぼうな声に顔を上げると、不機嫌な顔をした渉がいた。
走ってきたのか汗をかいていて、少し息が上がっている。
「っ、ばかっ！」
「わっ！」
その不機嫌な顔に無性に腹が立って、貴重品を入れていた巾着を渉に投げつけた。
「なんなの！？　なんで勝手にいなくなるの！？　どうしていつもいつも渉は……っ！」
私を置いて行くの。
そう言いいそうになって、鼻がツンとして、泣きそうになっている自分に気がついて口を閉じて、渉の視線を避けるように俯いた。
「ん」
渉の大きな背中が私の前に差し出された。
「……なに」
「歩けないんだろ」
「あ、歩けるよ！」
「いーから、素直におぶられろよ。さもなきゃ肩に担ぐぞ」
「う……」
渉の肩に手をかけるとひょいっと背中にのせられて、渉はゆっくり歩き出した。
「……悪かったな」

「え？」
「置いて行って」
「……」
「足、大丈夫か」
「大丈夫……」
渉がよっ、と私を抱え直したどさくさにまぎれて、ぎゅっと渉の首に手を回して右頬を渉の背中にくっつけた。
「わ、たる……？」
「なに」
渉の背中はとても熱くて大きかった。
「好き」
「……は？」
「好き、渉が好き」
溢れた想いはもう止まらない。
ずっと怖くてためらっていた。幼なじみという安全な柵を壊してしまったら、渉はもう帰ってきてくれなくなるんじゃないかって、そう思うと言えなかった。
「もう、やだ……行っちゃやだ……。これ以上、私の手の届かない遠くに行かないでよ……っ」
ついに零れてしまった涙が渉のTシャツを濡らす。
「俺が、いつ千秋の手の届かないところに行った？」
「行ってるじゃない！　高校行って寮に入ったときも私に何も言わなかった！　今度プロになったら、もう帰ってこないんでしょ！？」
感情に任せて叫ぶように渉を責める。もう、最低だ。
「帰るよ。いつだって俺の帰る場所は千秋がいるところだ」
「え……」
「寮に行くとき言わなかったのは、その、別れっぽくていやで……」
「何、それ……」
「笑顔で送り出されるのも、泣いて送り出されるのも辛ぇーなーって思ったら、言えなくて」

涉が、大きく息を吐く。そして歩みを止めて、顔だけ私のほうに向けて言う。
「俺は、お前が俺を好きになるずっと前から、お前のことが好きだ」
「う、そっ」
「うそじゃねーし。さっきだって、なんか男と楽しそうにしてるの見てすげー腹立ったし。浴衣すげー可愛いし」
「っ……！」
「ちゃんと進路決めてから言おうと思ってたんだけど」
私だけがわかる、涉の笑い方。
「俺の彼女になって。千秋」
だから私だって、笑う。
「ばーかっ！」
涉の背中をぎゅっと強く抱きしめる。もう離さない。
眩しいなんて言わないで、私は彼と一緒に前に進む。
「よっしゃ、走るか！」
「ちょっと！　落とさないでよ?！」

甘い飴の奥には、もっと甘いりんごが待っていた。
りんご飴のような真っ赤な大きな花火に向かって走る涉にしがみつきながら、私は残りの夏の日々を涉と何をして過ごそうかと胸を膨らませた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9351v/

りんご飴

2011年8月19日10時41分発行